

ブルックリン海軍造船所の閉鎖とニューヨーク都市労働者の生活世界

南 修平

はじめに

本稿では、かつてアメリカ海軍最大の造船所として繁栄を誇ったブルックリン海軍造船所 (Brooklyn Navy Yard. 以下BNYと表記^①) の栄枯盛衰を辿りながら、その過程がニューヨークの都市労働者にとっていかなる意味を持ったのかを考察する。

歴史家J・B・フリーマンによれば、二〇世紀半ばのニューヨークは、各地でストライキが頻発する労働者階級の街そのものであり、非フォード主義の労働システムが根強く残る熟練工の街であった^②。BNYはそうした労働者の街・ニューヨークを象徴する存在であり、第二次世界大戦中に七万人超の労働者を有し、軍事的貢献はもとより、地域経済の中心となっていた。しかし、第二次大戦の終結とともに造船景気は後退し、一九六六年六月には閉鎖へ至る。閉鎖の直接的要因としては、国防省が主導した米軍の近代化・合理化の推進が第一に挙げられる。しかし、本稿では軍事的・経済的要因からBNYの閉鎖を見るのではなく、そこに働く労働者の具体的姿に

焦点を当て、彼らがB N Yでの労働を通じていかなる地位やアイデンティティを獲得し、またそれらが揺らいでいくのかを検証し、その歴史的意味を問うことを主眼とする。

本稿で扱うB N Y及びニューヨーク労働史に関する先行研究では、先述のフリーマンの研究が重要である。フリーマンは第二次大戦後のニューヨーク史を労働者階級の歴史として捉え、激しく変化する大都市ニューヨークに生きる労働者の姿を描き出している。⁽³⁾ またフリーマンは建設労働者が保有する独自の労働文化・規律についても考察しており、労働者の生活世界を考える上で多くの示唆を与えている。⁽⁴⁾ しかしフリーマンの考察は、労働の動向を中心とし、各々の職場を抛り所にそこから様々な諸関係を形成し、生活を営む労働者個々の具体像へ十分踏み込んだものではない。

B N Yを正面から取り上げた先行研究は管見の限り極めて少ない。わずかに、B N Yの閉鎖過程で展開された政府・軍・労組・政党各々の政治的力関係を分析したL・T・カールソンの研究や、⁽⁵⁾ B N Yにおける女性労働者を例に、第二次大戦中に男性の労働現場に進出した女性の躍進が、実際には極めて限定的なものにとどまったことを論証しようとしたA・スパーの研究がある。⁽⁶⁾ しかし、ともにB N Y労働者の実態は部分的にしか把握されていない。

第二次大戦期の造船所内の実態を具体的に観察し、分析した研究としては、K・アーチボールドがあげられる。アーチボールドはUCバークレーの大学院生だった一九四二年から二年間カリフォルニア州オークランドの民間造船所に労働者として勤務し、そこでの経験を一九四七年に著した。第二次大戦当時、労働現場では人種や性、民族を超えた団結が実現されていることが喧伝されていたが、アーチボールドは自らの経験から、実際には造船所で働く労働者の間には様々な境界があり、団結とは裏腹な状況があったことを指摘している。⁽⁷⁾ アーチボールド

の観察は極めて興味深く、B N Yとの共通項も多く見受けられる。しかし、造船所の経営母体が海軍でなく民間である場合、雇用形態が異なり、単純な比較はできない。さらに西海岸のオークランドとニューヨークでは、労働者の来歴や彼らを取り巻くコミュニティの環境などに大きな相違がある。

そこで本稿では、B N Y労働者の労働生活に焦点をあて、彼らのアイデンティティの形成とその揺らぎを分析する。こうした方法論をとる最大の理由は、労働生活が、日々の生活を物質的に支えるだけでなく、階級やエスニシティ、ジェンダー等様々な社会的関係を構成する一つの基軸になっていると考えるからである。

本稿ではまず、B N Yの歴史を概観し、次にB N Yが繁栄の頂点に達する第二次世界大戦期を中心に、B N Y内で構築されていた独自の労働システムや人種、ジェンダーから見た労働者の世界、さらにB N Y労働者の保持していた労働文化や価値観を詳細に検証する。最後に、B N Yが閉鎖に向かう過程で労働者が保持してきた秩序がいかに揺らいでいくのか、そしてまたそうした揺らぎはいかなる歴史的意味を示すものなのかを検討する。

史料としては主に、政府・海軍のB N Yに関する公文書や元B N Y労働者が残した様々な歴史史料、B N Y内で発行されていた週刊紙、元B N Y労働者へのインタビュー記録などの一次史料を用いた。

一 ブルックリン海軍造船所小史

現在マンハッタンとブルックリンを結ぶ橋は三つあるが、B N Yはそれらのうち、北側にあるウィリアムズバーグ・ブリッジと中間にあるマンハッタン・ブリッジの間に挟まれたイースト・リバーに面する場所に位置している（次頁地図参照）。この周辺は豊かな海岸線と水資源を有していたため、早くから入植者たちによる開拓が進ん



図1 BNYの位置

出典 Institute for Urban Studies, Fordham University and Tippetts-Abbett-McCarthy-Stratton Engineers and Architects, *The Brooklyn Navy Yard: a Plan for Redevelopment*, 161.

一つが戦艦メイン号の建造であった。一八九五年BNYで完成したメイン号は三年後ハバナ港で爆沈し、米西戦争勃発の契機となる。この戦争を経てアメリカが本格的に帝国主義国家としての道を歩み出すのは周知の通りである。

二〇世紀に入ると帝国主義列強は競って最新鋭の戦艦を造り始めた。第一次世界大戦中BNYでは、真珠湾攻撃で撃沈されることになる戦艦アリゾナや同ニュー・メキシコ等が建造され、対潜駆逐艦四九隻も造られた。一九二二年のワシントン条約締結で各国に軍縮が義務付けられると、BNYでは第一次大戦中最大一万八千人に達

していた。一九世紀に入ってこの地に着目した海軍は一八〇一年二月二三日、既に同地で造船業を始めていた民間人から四万ドルで造船所を購入し、同年五月には湾岸地区の全権利を当時のブルックリン市から得る。こうして海軍造船所としての歴史が始まった。

BNYは当時技術的に最先端の位置にあった。南北戦争が始まる一八六一年までに二一隻の艦船が建造され、開戦後は急激に艦船の需要が高まり、戦争中新たに一六の艦船が造られた。それと並行して四一六もの客船・商用船を軍艦に改修する作業も行われた。南北戦争後、帝国主義列強による世界の分割合戦が過熱し、アメリカにとって海軍の更なる近代化は必至となった。その帰結の

した労働者数が約三五〇〇人まで落ち込むが、迫り来る世界戦争の影の中、一九三三年に大統領に就任したF・D・ローズヴェルトの下でB N Yには再び活気が戻った。一九三四年ヴェインソン・トランメル法の成立によって、継続的な新艦建造が可能になると、B N Yは一九三七年二〇年ぶりに戦艦ノースカロライナの建造を受注し、続いて同アイオワやミズーリ建造の注文も獲得した。

一九三九年になるとB N Yは本格的な戦時体制に組み込まれ、隣接する野菜卸売市場の土地四九エーカーが新たにB N Yに加わり、総面積は二九〇エーカー超までに拡大した。対日戦争開戦直前には、長さ約一一〇フィート、幅一五〇フィートを有する二つの乾ドックの建設が急ピッチで始まり、開戦直後には半径一一五フィートに渡って重さ三五〇トンもの重量物を持ち運ぶ当時世界最大のハンマーヘッド・クレーンも導入された。巨大なクレーンの威容は、B N Yに入港してくる艦船が最初に目にするランドマークとなり、一九四一年一月からB N Yの公式機関紙として労働者向けに発行された週刊紙The Shipworkerのヘッドラインを飾るシンボルにもなった。

対日戦争が始まった時点でB N Y内には三〇〇以上の建物が林立し、六つの乾ドック（分工場のものも含めれば七つ）、九つの埠頭、二つの造船台、二四マイルに及ぶ鉄道、五マイル超の舗装道路と六マイル超の舗装歩道、完璧な上下水道システム、大型の発電所等が備わっていた。その他に膨大な数の労働者の胃袋を満たすフル・サーヴィスかつ二四時間営業の食堂が八つあり、二八の酒保も兼ね備えていた。

真珠湾攻撃以後B N Yは二四時間フル稼働状態となった。第二次大戦勃発から日本の正式降伏までに三隻の戦艦と四隻の空母、八隻の揚陸艦が造られるが、それ以上に重要な作業となったのは修理や点検、改修工事であった。戦場で破損した連合軍の艦船五〇〇隻以上がB N Yで修理され、二五〇隻以上の艦船が軍事転用の改修工

事を施された。労働者数も一九四一年一月末の時点で一万七二八二人であったのが、一九四三年中には最大で七万人を超えるまでになった。勤務は二四時間交代制になり、何日も休みなく勤務を余儀なくされるケースが常態化した。機械工として当時BNYに勤務していたH・タトウィッツによれば、週七日労働は恒常的で、二日間では休日はずか一日という忙しさだった。また、一九四二年から主に部品供給工として八年間BNYに勤務したユダヤ系のS・ブラッドスキーによれば、「人生で安息日に働いたのは戦時中だけ」で、ラビさえ「戦時中は働くべきだ」と述べるほどの忙しさだったという。¹⁰ BNY周辺地域には二四時間営業の食堂や居酒屋が多数存在し、作業着を洗濯するクリーニング店、水兵用の洋服店等も二四時間営業であった。¹¹ さらに、労働者を職場に運ぶ交通機関も二四時間稼働し、当時主要な通勤手段だった市バスは毎時一〇本走っていた。¹²

BNYを中心に、地域一帯は明かりが灯り続け、造船所からは常に重機や溶接等の作業音が響き、頻繁に出入りする艦船の音も鳴り響いた。街や通りからは、交通機関や人々の喧騒が絶えなかった。BNYはコミュニティに活気をもたらし、人々の生活やつながりを支える中心的存在になっていたのである。

二 BNYの職階制度と人種・ジェンダー

BNYを内側から支えていたのは白人男性の熟練労働者を頂点とする厳格な位階制を持つ労働システムであった。通常造船労働においては、単純なライン労働では不可能な作業工程が多く、多岐にわたる熟練労働が必要とされる。造船所内には専門技術ごとに多くの労働部門 (struc) (crew) が存在し、BNYの場合それが一八あった。¹³ 溶接やボイラー、板金加工、パイプ、塗装、電気関係、木工など実に多様な職種が存在したが、どの労働でも熟練技

術を要する作業工程があり、長年経験を積んだ熟練労働者によってその技術が受け継がれていた。

雇用条件は海軍省及び合衆国公共サービス委員会 (United States Civil Service Commission. 以下USCSC) によって段階的に整備され、厳しい雇用プロセスが採られていた。就職希望者は希望職種を申込書に列挙して登録を行い、実技や筆記試験、面接、試用期間などを課された上で雇用されていた。⁽¹⁹⁾

BNYでキャリアを積んでいくのは厳しい道のりだった。熟練労働者として大勢の労働者を配下に持ち、指揮・監督する立場になるには、最初に見習い期間 (Apprenticeship) を経た上で一定の水準をクリアしなければならなかった。BNYではグループ・マスター (Group Master) を頂点とし、見習い (Apprentice) をその最下部とする熟練労働者の厳格なヒエラルキーが存在し、さらにその下に多くの未熟練労働者がいた。

BNYに見習い制度が導入されたのは一八七一年であったが、現場での訓練に加え、海軍省、USCSCが共同で後援する講義課程が一九一二年から始まった。受講希望者の条件は、一六歳以上の合衆国市民であること、労働に耐え得る健康状態を有することであり、候補者は筆記試験を受けた上で選抜された。試験はニューヨーク地区のUSCSCが一年に一回ニューヨーク大都市圏の各地に会場を設けて実施し、受験者は数学や物理の基礎知識、文法や文章読解力、歴史について問われた。合格するとその後は見習いとして現場実習及び教室での講義で技術や知識を習得する課程に入った。

講義と実習の割合は一・三で、講義は数学・科学、英語、製図法、産業組織という四つのカテゴリーに分かれており、見習いはそれぞれ異なるカテゴリーで必要な知識を身につけることが求められた。現場実習では、先輩熟練労働者の監督の下、見習いは造船に必要な全ての職種で作業を行い、各作業で必要な技術が満足のいくレベルに達しているかを見極められた。見習い期間では、各見習いに対して年四回の評価付けが行われ、見習いは講義

で常時七〇点以上をマークし、現場実習でも常に「満足 (satisfactory)」「より優れている (better)」という評価を得ることが必須とされた。こうした四年間に及ぶ見習い期間を経て、ようやく熟練労働者としてのステップを踏み出すことが可能となるのである。¹⁶⁾

このような厳しさがある一方、BNYで職を得ることは、生活に相対的安定を得られるという重要な側面があった。特筆すべきは、BNYの熟練労働者は、徴兵免除の特権を享受できたことである。熟練技術を持つ労働者が戦場で死傷すればBNYは機能停止に陥り、それは戦争遂行上避けなければならぬ事態であった。ゆえに、技術が高ければ高いほどBNY労働者が戦争へ行く可能性は低くなった。一九三六年からBNYで板金工見習いとして働き始めたL・スコルニックは以下のように証言している。

「二〇歳で働き始めて、徴兵の年なんだけど、でも造船所でメチャクチャいい仕事にありついた。監督だよ。俺の責任下に二〇〇〜三〇〇人の労働者がいたんだ。もちろん、徴兵されなかったさ」¹⁷⁾

機械工見習いとしてBNYで働き始めた前述のタトウィッツは戦争開始後軍に志願するが、拒否された。軍の担当者は彼に「志願するのはとてもいいことだけど、当面は自分の仕事をする方が重要だ。君は見習いとして働いているからね」と言った¹⁸⁾という。

労働者の賃金は、能力やパフォーマンスの数値化によって明瞭に区分され、それらの評価方法は定期的な労使協定で細かく取り決められていた。さらにBNYでの労働の安定ぶりを示すのが充実した社会保障や福利厚生制度だった。医療保険や労災補償、有給休暇や病気休暇制度等が事務職・現業職にかかわらずBNYの全労働者に



写真1 旗製造部門で働く女性たち

出典 New York Naval Shipyard, *Souvenir Journal: Sesqui-Centennial Anniversary* (New York, 1951), no page number より

保障されており、民間企業と比べると安心度は格段に違っていた。

BNYの熟練労働者の大半は白人労働者だった。黒人やプエルトリカン、フィリピン人などマイノリティも雇用されていたが、その割合は極めて小さく、熟練労働者になる者もごく少数であった。BNYについて調査を行ったコロンビア大学のJ・R・ストボによれば、一九三四年での黒人労働者が全体に占める割合は六・二%で、そのうち約半分は技術を持たない者が属する賃金等級IグレードIであった。一九三〇年代を通してBNYの雇用数全体は上昇し続けるが、黒人の割合は一九四〇年末の時点で三%と、むしろ低下した⁽¹⁹⁾。一九四一年六月二五日にローズヴェルトによって行政命令八八〇二が出され、政府や軍事関連産業内での人種、信条、国籍などに基づいた差別的雇用が禁じられるが、BNYの状況に大きな変化はなかった。

BNYにおける女性労働者の雇用も微々たるものにとどまった。女性の現業部門への採用は、一九四二年八月黒人女性二人を含む五人の女性が採用されたことで始まるが、それまでBNYに女性労働者がいなかったわけでは

ない。事務部門の補助的労働（タイプライター、秘書、経理など）には専ら女性が採用されており、現業部門でも一九四二年以前から唯一女性が勤務できた部署として艦船に掲げる旗やペナントの製造労働があり、それらはほぼ女性だけで構成されていた（写真1参照）。

深刻な労働力不足から政府主導で女性労働者の現業部門への就労が推進されるが、黒人・マイノリティと同様、やはり労働者総数に占める割合はさして大きくならなかった。B N Yでの女性労働者の割合がピークとなるのは一九四五年一月時点での七・七%だが（労働者総数六万一六四人中四六五七人）、同割合について全米の海軍造船所平均を見ると、そのピークは一九四四年一月時点での一一・五%である。B N Yの数字は全米平均を大きく下回っており、B N Yでは他のいかなる海軍造船所よりも男性の存在感が圧倒的であったことが見て取れる。⁽²⁰⁾

B N Yで女性労働者の採用が進まなかった最大要因としてスパーは、B N Yが海軍造船所の中で最も熟練労働者の技術に依存する旧タイプの造船所であったことを指摘している。⁽²¹⁾ 大型戦艦や空母の建設・修理を専らとするB N Yでは、多くの熟練技術が不可欠であり、会得している技術がほとんどない女性の必要性は相対的に低かったのである。

たとえ採用されても女性労働者の雇用条件は最初から限定的であった。一九四二年三月以降採用された者は、原則的に戦間期及び戦争終了後半年間だけの勤務という条件が課せられており、状況次第ではその条件に関係なく真つ先にレイオフの対象にされた。女性労働者の多くが採用された職種は溶接や機械工の補助で、それらの部門で女性は最下位に位置づけられていた。熟練労働者としてキャリアを積むことは制度上排除されていなかったものの、そのための訓練課程は時間外に行われることが多く、家庭を抱える女性にとって、労働現場に長く拘束されて訓練を受けることは非常に困難であった。⁽²²⁾ たとえ監督的立場に立つ女性労働者が現れても、原則として指

揮できるのは配下にある者が全員女性で構成されている現場でのみ、という制約もあり、性別分業の思想は徹底していた。⁽²³⁾

黒人・マイノリティや女性の労働条件は極めて不安定であったが、そうした傾向をより促進させた要因として帰還兵の問題があった。兵役を終えて帰国する大量の帰還兵に軍需産業での職を手配することは最も手っ取り早い再就職対策であり、戦争終結が迫った一九四四年には帰還兵優先法が制定され、その傾向はさらに強まった。戦争終結直後から始まったB N Yでの大規模な人員整理では、未熟練労働者である女性がまず解雇され、帰還兵がその後に入り、長く女性で占められていた旗・ペナント製造部門ですら完全に男性の職場となった。こうして一九四七年八月までにB N Y労働者の六四%が帰還兵で占められるようになるのである。⁽²⁴⁾

三 B N Yを支配した「男らしさの文化」

白人男性の熟練労働者を基軸とする労働システムは、そこに位置する者たちに、自らの労働とその技術に対する強い自信と誇りを抱かせた。

B N Yでは頻繁に死亡・負傷事故が発生し、労働者は常に死の危険性を伴う過酷な作業に従事していたが、造船労働の中でもとりわけ熟練技術が必要とされた屋外労働は最も危険な作業の一つであった。いかなる気象条件であろうと納期までに作業を完成させなければならぬため、労働者は危険を顧みずに船にはしごをかけて溶接や塗装を行った。元板金工のスコルニックは当時の状況を以下のように語る。



写真2 BNYの潜水溶接工

出典 Brooklyn Public Library,
Brooklyn Collection, EAGLE
0422.

う過酷な作業はチームワークが特に重要で、こうした作業も特別な訓練を積んだ男性労働者だけで担われていた(写真2参照)。

彼らは命懸けて艦船を造ることに労働者として、愛国者としての誇りを感じ、危険な作業を常にとともにする同僚を誇りとした。熟練労働者の間には、強烈な仲間意識が生まれ、作業を重ねるごとに相互の絆が強められた。それはその中にいない者(非熟練労働者)との差異を必然的に感じさせ、選別された者としての圧倒的優越感の醸成につながった。先述のスコルニツクは、二〇〇〜三〇〇人の労働者を配下に抱える監督にまでなるが、彼は熟練労働者としての自負を以下のように語る。

「溶接工やバーナーを使う類の連中がいたけど、俺たちはそいつらを道具と考えていた。連中は本当の職人

「最も近い表現としてはダントの『地獄篇』だね。騒音と煙と溶接—すべての中でやるんだ。一二〜一四人死ぬことなしにでっかい船は造れない。(質問者:何があつた?)事故さ。(どんな?)ほとんどの事故は落下物、転落かな。(どこで起こった?)船外さ。建設中の船で、船内じゃない」⁽²⁵⁾

この他、船底部分の溶接作業も危険な作業であつた。重たい潜水服を着ながら冷たく、暗い海中に潜って溶接を行

(journeyman) じゃないと思つた。あいつらは俺たちの道具。俺にとって溶接工は釘のようなものだった。バーナー工は鋸みたいなものさ。何かを焼いたり切ったりしたい時、連中が要つた。道具みたいなものさ」⁽²⁶⁾

戦争が始まって、公にはいかなる職種においても差別無く誰でも国家に貢献できることが謳われ、Shipworker 紙上でも女性労働者の活躍が頻繁に報じられた。しかし、実際にはそれらは稀な例でしかなく、BNYは男性中心主義の思想と文化に圧倒的に支配されていた。BNYでの第二次世界大戦中の事故率は、女性の方が低かったが、Shipworkerによればそれは、「弱い性だからこそ、より注意深い」からだった。⁽²⁷⁾このような評価に見られるように、女性がその能力を示そうとしても、所詮それは「か弱い者たちの懸命な努力」という形でしか受け取られなかったのである。

他にBNYにおける男性中心主義的文化の支配を示すものとして、新造艦船の命名式(Christening)が挙げられる。新しい艦船が完成する度に進水式が行われるが、命名式はその中のメイン行事であった。どの艦船でも進水式はたいい国歌斉唱、BNY付属牧師による聖書朗読、BNY長官や海軍幹部の挨拶、上院議員などゲストからの挨拶の順で進む。登壇するのは男性ばかりで、女性は受付やアナウンス係専門だった。女性が登壇するのは、プログラムの最後を飾る命名式の時のみである。新造艦船の命名役は必ず女性で、それも専ら海軍幹部や上院議員の妻か娘がスポンサーとなり、命名役を演じていた。⁽²⁸⁾命名式は、盛装した男女が完成したばかりの艦船にシャンパンをかけて盛大に祝う、まさにジェンダー化された儀式であった。

第二次大戦の終結はBNYの規模を大幅に縮小させ、戦争終結直後から大規模な人員整理が始まった。一九四五年八月一四日の対日戦勝利の時点では約六万九〇〇〇人の労働者が存在したが、一九四六年四月には三万五三

〇〇人になり、労働者数は一九五〇年の朝鮮戦争勃発まで減り続け、約九千人まで落ち込んだ⁽²⁹⁾。

とはいえ、長年B N Yで維持されてきた労働システムは第二次大戦終了後急速に崩壊したわけではなかった。朝鮮戦争勃発で緊張が高まった結果、労働者数は一万五千人程度まで回復し、一九五二年には戦後初の新艦建造—空母サラトガの注文を得、一九五〇年代に合計三隻の空母の注文を得た。一九五〇年代のB N Yは、労働者数で一万数千人レベルを維持し、冷戦対立の「恩恵」によって仕事自体も適度に舞い込んでいた。ゆえに、依然として白人男性の熟練労働者を中心とする労働システムは機能し続けた。

一九五一年B N Yは開設一五〇周年を迎えた。この時、様々な記念事業を行うためにニューヨーク市長インペリテリを委員長とし、ニューヨーク州選出連邦上院議員、ニューヨークの各区長 (President of Borough) や造船関連会社幹部など総勢二七名の記念委員会が組織され、記念の銘版や公印の作成、記念誌の発行や記念祭開催など、B N Yの存在意義が大々的にアピールされた。一月一日より一・二〇ドル売り出された一万人限定の記念祭チケットは瞬く間に売切れ、二月二三日に第一〇六歩兵部隊本部を会場に記念祭が盛大に行われた。

このように、一五〇周年を迎えた頃のB N Yはまだ「偉大な歴史」の遺産が大きく、「男らしさの文化」に支えられた労働者の誇りは失われてはいなかった。そのことを示すものとして、Shipworker に設けられていたCamera Query という連載コーナーを見てみたい。ほぼ毎号掲載されるこのコーナーは、六人のB N Y労働者が同じ質問にコメントするもので、普段は他愛ない質問が多いが、時として彼らの誇りや価値観を表す場合があった。一例を挙げると「あなたは一家の稼ぎ頭⁽³⁰⁾」(May 6, 1955) という質問には男性四人、女性二人の回答者全員が、男性が稼ぎ手であることを「当然」と答えている。取り付け工のB・ハーマンは「家でうまくいくには男がイニシアチブ、リーダーシップをとることさ。妻もそれに同意するよ……とにかく俺は女が稼ぎ手になるなんて思わ

ない」と言い、計画局に勤務する女性事務員M・L・ステイツは「夫が一家の長であるべきだと思うわ…家での最終責任は夫にあるし、常に彼は未来に目を向けて行動するでしょう」と話している。

また、「妻は夫が仕事に行く前に起きて朝食を作るべき。」(March 16, 1956) という質問にも男性四人、女性二人が回答しているが、男性一人を除いて全員が「作るべき」と答えている。板金工のW・キャンベルは「妻がそうしないなら他に誰がするのさ? まずい食事を外で食べさせられるより、家でうまい食事をとってその日を夫が始めるのを妻は見るべきだ」と述べ、武器局に勤務する女性事務員A・ゴールデンバーグは「絶対そうね。それは女が最低限できることだし、単なる義務じゃないのよ」と答えている。

この他にも「女より男の方が運転がうまい。」(March 8, 1956)、「女性を副大統領候補にという議論についてどう思う。」(Aug 19, 1956) など直接BNYとは関係しない質問もされているが、回答はそれぞれ女性の能力を下位に位置づけた男性優位論で占められている³¹。このコーナーに登場するのはBNY労働者のごく一部で、編集の恣意性は免れないが、彼らの生活スタイルを垣間見ることが可能であり、BNYでの労働実態を考えるならば、当時のBNY労働者の価値観が多分に反映されていると言えよう。

四 崩れ始めた労働者の秩序—閉鎖に向かうBNY

依然として自信と誇りを失わずにいたBNY労働者であるが、その一方で彼らの維持してきた秩序を崩す新たな変化は確実に迫っていた。熟練労働によって船を建造するスタイルは、今やスピード化を求め、コスト削減を要求する時代の趨勢から取り残され始めていた。海軍内でコスト問題をいち早く知る立場にいたBNY司令官

コードレイは「我々の今後はタイコンデロガやサラトガ⁽²²⁾の仕事をかかなくできるかにかかっている。未来はバラ色ではない。質を落とすことなく仕事をするのだ」と危機感を表し、BNY労働者に秒単位で仕事をし、低コストで質の高い仕事を励行することを強調し続けた。⁽³⁴⁾労働者も危機感を持ち始めており、Shipworkerの連載コーナーであるCamera Queryを見ると、すでに一九五〇年代には、自らのおかれた立場を意識していたことが分かる。例えば、「一〇年後の造船所をどう予想する?」(Dec. 23, 1955)との質問に六人の回答者全員が「原子力時代の到来」と答え、「今日、良い教育が良い職か、どちらに価値がある?」(Feb. 10, 1956)という質問にも六人全員が「教育」と答えている。後者の回答理由として彼らは「筆者注: 教育は(選択の機会が豊富になる。機械はもっと訓練が必要な新しいもの)変わって、今の機械工の技術は後景に追いやられている」「今いる奴より教育を受けて学位を持つ奴の給料の方が高いし、上がり続けている」などを挙げており、熟練労働者たる自分たちが、もはや古い人間になりつつある現実を少なからず感じ取っていた。

それでもなお、BNY全体では危機感が高まらなかった。海軍造船所の中でもBNYこそ多くの歴史的艦船を生み出してきたという「栄光の歴史」に対する自負ゆえに、BNY労働者は新しい時代の波を感じつつも、時代の変化を直視できないでいた。⁽³⁵⁾彼らが気づいた時、すでに時代は彼らの想像を遥かに超えて進んでいた。BNYが得意としてきた空母部門で、いち早く原子力型への切り替えが始まっていたのである。BNYには原子力艦船に対応できる技術も設備も無く、大都市ニューヨークに位置するロケーションも原子力を扱う上で大きなマイナスイメージになった。

一九六一年ケネディ政権の国防長官に就任したR・S・マクナマラは抜本的な米軍の近代化・合理化計画に着手し、不要な軍備や施設を次々にリスト・アップして大々的な整理を進めていった。一ヶ所に存在した海軍造船所に対する調査も始められ、ついに一九六四年一月一七日、BNYは海軍造船所の閉鎖対象のトップとして

公示されるのである。⁽³⁶⁾

ブルックリン周辺のコミュニティもこの頃大きく変化しつつあった。往時にはB N Y労働者の多くがB N Y周辺に住んでいたが、ある程度の収入を得た労働者は、戦後の大規模な人員削減やそれに続く規模縮小と軌を一にしてブルックリンを離れ、新たに開発された郊外へ移っていった。一九六四年B N Yの閉鎖が発表された頃に、ブルックリン地区内に住むB N Y労働者はB N Y労働者総数の半分以下となり、B N Y周辺地域に引き続き住む労働者は約一〇%にすぎなかった。⁽³⁷⁾ B N Yの衰退はコミュニティから仕事を奪い、生活の不安定化を招来し、失業や犯罪が急増した。その変貌ぶりは海軍関係者ですらB N Yに赴任することに大きな不安を吐露せざるを得ないほどであった。⁽³⁸⁾

また、B N Y周辺地域の人口は一九六〇年～一九六七年の間に一一%減少していたが、労働者人口で見ると二七%も増加していた。住民の構成では、黒人・プエルトリカンの割合が四四%から七五%に上昇する一方、白人は五六%から二四%と激減し、わずかの間に激しい変化が生じていた。⁽³⁹⁾

こうした変化はしかし第二次世界大戦中にすでにその萌芽があった。戦争中B N Yには大量の臨時労働力が、かつてのような厳格な審査を経ずに流入していた。急増したこれら臨時労働者は、新たに創り出された地位に区分されるなど既存の労働システムの枠外で扱われ、これまで維持されてきた職階制度とは別の軸が戦争によって生まれた。臨時労働者は便宜的労働力として“Temporaries”と呼ばれ、B N Y労働者に適用されてきた連邦の雇用ルールの対象とされない者も出て来た。戦時になりふりかまわず人海戦術で作業を進めるやり方が導入されることで、B N Yで長らく保たれていた熟練労働者を頂点とする秩序は確実に崩れ始めていたのである。

また、第二次大戦中に雇用された黒人・マイノリティが戦争終了後に解雇されたことは、彼らがこの地域から

姿を消したことを意味するわけではなかった。差別にもかかわらず、BNYでの経験は彼らにとってこれまでにない条件下での労働であり、解雇後もニューヨークに残る者は少なくなかった。一九二九年仕事を求めて南部のニューオリンズからニューヨークに移り、一九四四年までBNYで働いていた黒人のD・A・キングは戦時中当時を振り返って言う。

「何の問題、トラブルも無い。人間としてリスペクトされていたと思う。今までそんな風なことは無かったし、見たことも聞いたことも無かった：俺たちは同じ条件で働いていたからね：とてもフェアだったと思う」⁽⁴⁰⁾

BNYでの黒人労働者の割合は次第に上昇し、造船所の閉鎖が発表された頃、彼らはBNY労働者の一九%を占めるまでになっていた。⁽⁴¹⁾ このような人種構成の変化はBNYにおける熟練労働の比重が低下していることを示すと同時に、熟練労働者が大きな位置を占めてきたニューヨーク全体の産業構造の転換をも意味していた。造船を含む製造業全体でオートメーション化が急速に進んだことで熟練労働は次第に不要となり、とりわけ印刷業や建設業、港湾関係でその傾向が著しかった。その一方でオフィス・ワークや小売業など第三次産業に就く労働者の割合は増大し、明らかに熟練労働者の地位は相対的に低下していたのである。⁽⁴²⁾

さらにこの頃までに、熟練労働を担ってきた白人労働者への批判が高まっていたことも見逃してはならない。高揚する公民権運動は人種隔離の象徴として白人子弟で占められる建設業の見習い制度を特に激しく批判し、行政府に即時の具体的解決策を要求していた。白人男性熟練労働者を頂点として保持されてきた人種的な秩序も重大な「危機」に直面し、急速に変化し始めていた。⁽⁴³⁾

結論

B N Yのように白人男性の熟練労働者が相対的に安定した労働生活を享受し、その中で独自の秩序と生活世界を創出してきた背景として、アメリカ資本主義の発展とその下における労働者の状況を指摘しておかなければならない。ニューディール期に構築され、その後保持されてきた組織労働者と公権力、経営側相互の提携関係は、第二次大戦を経て発展するアメリカ資本主義と軌を一にするものであった。連邦政府と雇用関係を結ぶB N Y労働者は、まさにそうした関係の典型であり、それゆえに、一九六六年六月のB N Yの閉鎖は、白人中心の組織労働者たちに従来の関係の見直しを意味するポスト・ニューディール時代の訪れも示していた。⁽⁴⁴⁾

では、B N Y労働者にとっての相対的安定とはどのようなものであったのだろうか。それは、カールソンが指摘するように、労働者の生き方(A Way of Life)そのものであった。⁽⁴⁵⁾ B N Yの繁栄を支えた白人男性の熟練労働者は日々自らの技術で船を建造し、それらを国家に供出する労働に従事していた。それは国家に対する愛国市民としての具体的な貢献であり、彼らは労働を通じて愛国者たる自らを体感していた。そして、彼らにとってB N Yは家族を支え、養うための職場であり、一家の長としての地位と誇りを十分感じさせる場所でもあった。また掛け替えない仲間と危険をともしで働き、相互の絆を強めていく場でもあった。B N Yの存在によって、多くの労働者がこうした関係を築き、コミュニティ全体の秩序はB N Yの存在を中心に保たれていたのである。B N Yの閉鎖は、そこに働く労働者が依拠してきたナショナルで男性的なアイデンティティが動揺し、崩れ始めた一つの帰結であった。そして、ニューヨークにおける白人男性の熟練労働者を中心とした労働者の世界が、

抗い難い変化に直面し、もはやそうした世界を維持するのが困難になっていたことをも示していた。

BNY閉鎖後のニューヨークは深刻な財政危機に陥り、その中で人種・エスニシティ関係の悪化が進んでいく。その一方、公民権運動、ヴェトナム反戦、フェミニズムなど様々な社会運動が現れてニューヨークは混沌とした状況を迎え、コミュニティの変化はますます進行する。BNYの閉鎖は、ニューヨークの混乱した時代の始まりをも予示していた。

- (1) BNYの正式名称はNew York Naval Shipyardであるが、一般的には通称としてのBNYの方が広く流通している。たゞとから、本稿でもBNYの名称を使用する。
- (2) Joshua B. Freeman, *Working-Class New York: Life and Labor since World War II* (New York: The New Press, 2000), Introduction, Chapter 1, 2.
- (3) Freeman, *Working-Class New York*.
- (4) Joshua B. Freeman, "Hardhats: Construction Worker, Manliness and the 1970 Pro-War Demonstration," *Journal of Social History*, Vol.26, No.4 (Summer 1993).
- (5) Lynda Tepfer Carlson, "The Closing of the Brooklyn Navy Yard: A Case Study in Group Politics," Ph. D. Dissertation, University of Illinois, 1974.
- (6) Arnold Sparr, "Looking for Rosie: Women Defense Workers in the Brooklyn Navy Yard, 1942-1946," *New York History* (July 2000).
- (7) アーチボールドの原著が出版されたのは一九四七年。E・アーンセンとA・リヒテンシュタインが二〇〇六年に

- 彼女の研究を再評価する論稿を発表、約六〇年の歳月を経てアーチボルドの著書が再出版される運びとなった。アーネセン、リヒテンシュタインの論稿「アーチボルドの著書は以下の通り。Eric Arnesen and Alex Lichtenstein, "Labor and the Problem of Social Unity during World War II: Katherine Archibald's Wartime Shipyard in Retrospect," *Labor: Studies in Working-Class of the Americas*, Vol.3, No.1 (Spring 2006); Katherine Archibald, *Wartime Shipyard: A Study in Social Disunity* (Berkeley: University California Press, 1947; reprint with Introduction and Further Reading, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2006).
- (8) この法律はその後何度か改定され、造船所経営の拠り所となった。詳しくは Carlson, "The Closing of the Brooklyn Navy Yard," 24-27.
- (9) Interview with Henry Tarowicz, by Benjamin Filene, July 29, 1987, Brooklyn Historical Society. (以下「BHS」記述)。
- (10) またブラッドスキーは当時の状況を以下のように述べている。「いつも残業していたのを覚えている。一日一〇時間働かなきゃいけない時があった: 八時間×七日で五六時間、それに加えて一〇時間の残業で週六六時間さ」 Interview with Solomon Brodsky, by Benjamin Filene, Aug. 6, 1987, BHS.
- (11) 一九二七年からBNY近くでテイラー・ショップを開業し、インタビュー当時も唯一この地域にとどまって営業を続けていたM・ファイエラによれば、テイラー・ショップのほとんどは頻繁に出入港を繰り返す水兵のためのものだったという。「労働者はどこでも服が買えるけど、船員はここだけだから。でも(筆者注・労働者向けの)二四時間営業のレストラン、ダイナー、サンドイッチ店があった。連中は戦時中三交代で働いていたからね」 Interview with Mike Faiella, by Benjamin Filene, July 31, 1987, BHS.

- (12) Sparr, "Looking for Rosie," 331.
- (13) Carlson, "The Closing of the Brooklyn Navy Yard," 14.
- (14) USSCの規則ではその他、軍事機密上の必要性から就職希望者に対する思想傾向及び性格チェックの実施、指紋捺捺義務、写真付IDカードの保持などが定められていた。
- (15) 数学・科学では代数学、幾何学、三角法、物理学、英語では作業指示書や教示書の作成、製図法では専門的な製図作成やブループリントの読解、産業組織ではマネジメントの役割とその問題点などを学んだ。
- (16) New York Naval Shipyard, "Welcome Aboard," undated, in Evelyn Rudon Materials, BHS.
- (17) Interview with Leo Skolnick, by Benjamin Filene, Aug. 19, 1987, BHS.
- (18) Interview with Henry Tatowicz.
- (19) BNYの黒人労働者数については以下を参照した。John R. Stobo, *Labor History Time Line of the Brooklyn Navy Yard* (January 2004; October 2004; June 2005); available from <http://www.columbia.edu/~jrs9/BNY-Labor-Time-Line.html>; Internet; accessed 18 April, 2008. 一九三四年及び一九四〇年の黒人労働者数の引用史料は以下。Letter from the Commandant to the Acting Secretary of the Navy, Subject: Information Concerning Negro Employees, February 27, 1934, LL/P14-2, E322/1932-34, RG181, National Archives-North East Region, New York City (NA-NY); Letter from the Commandant to the Assistant Secretary of the Navy (Shore Establishments Division), Subject: Advisory Commission to the Council of National Defense Requests Information regarding the Employment of Negroes under the Naval Establishment, November 30, 1940, LL/P14-2, E322/1938-40, RG181, NA-NY. 本稿からは以上の史料を含め、BNY史料に関する貴重な情報を提供していただいた。

- (20) Sparr, "Looking for Rosie," 319-320.
- (21) *Ibid.*, 322-323.
- (22) 一九四三年一月取り付け工 (shipfitter) の部門で女性初の熟練工 (leadervoman) が誕生するが、この時同部門で働いていた女性は一五〇〇人だった。 *Ibid.*, 328.
- (23) *Ibid.*
- (24) *Ibid.*, 337.
- (25) Interview with Leo Skolnick. なお、一九六〇年十二月一九日には空母コンステレーションの建造中に火災が発生し、死者五〇名、負傷者三三三名を出す BNY 最悪の惨事が起っている。
- (26) *Ibid.*
- (27) Sparr, "Looking for Rosie," 333.
- (28) 一九四四年一月二九日に命名式を行った戦艦ミズーリの場合、スポンサーはミズーリ州選出上院議員 H・S・トルーマンの娘、マーガレットであった。一九六四年六月二七日に進水式が行われたドック型揚陸艦オースチンとオグデンの場合、命名役はそれぞれ現職大統領 L・B・ジョンソンの娘リンダ、ユタ州選出上院議員 L・J・バートの妻ジャニスが務めている。詳しくは New York Navy Yard, "Launching of the U.S.S. Missouri: Battleship No. 63" 及び同 "Christening of the Amphibious Transport Dock Austin (LPD-4) and Ogden (LPD-5)" 参照。これらの史料は BHS が所蔵する Solomon Brodsky Collection に含まれている。
- (29) New York Navy Yard, *The Shipworker*, Feb. 23, 1951; New York Naval Shipyard, *Souvenir Journal: Sesqui-Centennial Anniversary* (New York, 1951), no page number.

- (30) 記念誌には現職大統領トルーマンからも祝いのメッセージ文が寄せられた。
- (31) 双方の質問に対する回答の特徴は女性の性格を先天的に弱いものとする論が多いことである。例えば後者の質問では「女が副大統領職に求められる困難に耐えられるとは思わない」(現業・男性)「女の人がそんな高い地位に向いているとは思えない…:女性はそのような重要な仕事で信頼されるほど合理的じゃないわ」(計画局・女性)といったことが語られている。
- (32) いずれもBNYで建造予定の空母名。
- (33) *The Shipworker*, May14, 1954.
- (34) *Ibid.*, June 24, 1955; Nov.4, 1955.
- (35) Carlson, "The Closing of Brooklyn Navy Yard," 166-167.
- (36) マクナマラが主導する海軍造船所合理化の詳細については以下参照。Carlson, "The Closing of the Brooklyn Navy Yard," 55-98. BNYが真の先に閉鎖対象となった軍事的・経済的理由については以下に詳述。Department of Defense, "Summary of Study of Naval Requirements for Shipyard Capacity," Nov. 17, 1964, Third Naval Districts and Shore Establishments, RG 181, NA-NY.
- (37) Institute for Urban Studies, Fordham University and Tippetts-Abbett-McCarthy-Stratton Engineers and Architects, *The Brooklyn Navy Yard: A Plan for Redevelopment* (New York, 1968), 9.
- (38) Carlson, "The Closing of the Brooklyn Navy Yard," 15.
- (39) Institute for Urban Studies, Fordham University and Tippetts-Abbett-McCarthy-Stratton Engineers and Architects, *The Brooklyn Navy Yard*, i-ii, 44, 49, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000.

発のため様々な調査をしたフォードハム大学都市研究所がB N Yに隣接する地域を独自に四三の地区に分けたものを指す。

(40) Interview with Rev. Daniel A. King, by Benjamin Filene, Jan. 20, 1987, BHS.

(41) *New York Times*, May 14, 1964.

(42) Freeman, *Working-Class New York*, 159-166.

(43) 元B N Y労働者のタトウィッツは言う。「質問者：過去四〇年のブルックリンの変化をどう思う？）今よりも当時の方が（筆者注：第二次大戦の頃）住みやすかったよ。人々はもっとお互いを助け合い、情熱的でフレンドリーだったと思う。今はとてもたくさんのことがある。エスニック・グループ、離散（spreading out）—以前は存在することに気づかなかった衝突：俺が働いていた頃、人種が何とか、どのエスニック・グループに属しているなんて考えなかった。今は俺たち全員アメリカ人っていうかわりに異なる集団つてのをやたらに強調する」 Interview with Henry Tatowicz.

(44) Robert H. Ziger and Gilbert J. Gall, *American Workers, American Unions: The Twentieth Century*, 3rd ed. (Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 2002), Chapter 7.

(45) Carlson, "The Closing of the Brooklyn Navy Yard," 113-122.

〔二〇〇八年四月三十日の審査を経て、同年十月二日掲載決定〕

（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）